新島襄のこころ　―イメージを通して―　(1)

畢生の目的・自由教育、自治教会

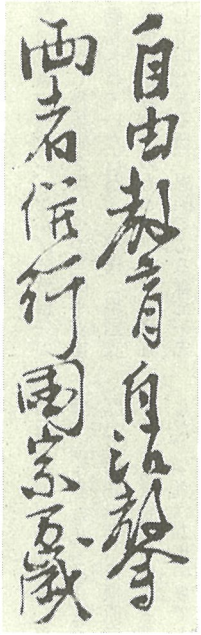
竹中正夫

新島襄が繰り返して用いた言葉の一つとして「自由教育、自治教会」の句をあげることができる。新島がいかにこの言葉を愛称していたことは、前後三回にわたって、彼の愛する弟子たち（大久保真次郎、広津友信、横田安止、『新島全集』第四巻、二四六頁、二五四頁、三一一頁）にこの言葉を書きおくっているのをみてもわかる。彼は、この言葉を用うるにあたって、「襄畢生ノ目的」という表現をとっている。「畢生ノ目的」とは生涯をかけての目標という意味である。新島の葬儀にあたって、国民新聞社は勝海舟が揮毫したこの句を霊前に供した。（『国民新聞』明治二三年二月四日）

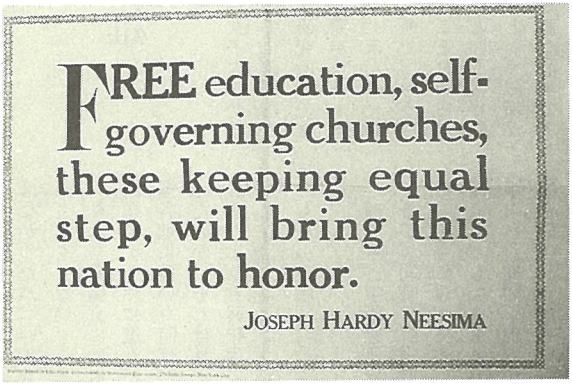
新島襄という人は、自由を求めた旅人であった。ここでいう自由とは、奔放に勝手気ままに生きることではない。新島は、人間が放縦に走ることなく、自らの心身を鍛錬することをたえず力説していた。またここでいう自由教育は、わが国の自由主義教育でいわれたような善意をもって個性尊重する教育そういうものでもない。もとより、新島は、学生たち一人々々の個性を尊重して大器に育てるようにつとめていた。しかし、新島にとって自由とは、もっと意味奥深いことばであった。ひそかに函館から米船に乗り込んだ新島は、封建的な拘束からの脱櫪（だつれき）をなして、真理を希求した旅人であった。在米中、岩倉特命全権大使一行の田中不二麿理事官から政府の要職に再三勧誘されながら、それに応じなかった新島のこころの根底には、真理に仕える自由人でありたいというねがいがこめられていた。

明徳館の壁面にある〝VERITAS LIBERABIT VOS〟「真理はあなたがたに自由を得させるであろう」（ヨハネによる福音書ハノ三二）という聖書のことばは、新島のこころをあらわしたものであるといってよい。新島の説教の一つに、「キリストノ目的」という説教がある。（『全集』二巻、三二八頁）彼は、キリスト目的は、「真理ノ国ヲ立、真理ヲ以人ヲ自由トシ、以人ヲ救フニアリ」とのべている。彼は「キリストハ真理ノ証ヲ為シ真理ノ国ヲ世ニ起セリ」（同書、三二四頁）という。このことばを書いたころ新島は一致教会と組合教会の合併に反対して、新島は、各個の教会の自治を尊重してやまなかった。（全集、二巻、四九九頁以下）。新島は専制主義と中央集権を排して真理に根ざした自由と自治の振興を教育と教会を通してはかろうとした。ここに彼の畢生のねがいがあり、国をおもうこころがあった。

（大学神学部教授）



（横田安止宛　明治二二年一一月二三日書簡より）



自由教育、自治教会、両者併行、国家萬歳の新島の句は A. L. ハウ宣教師によって英訳され米国バプテスト教会のポスターとなっている。このポスターはマサチューセッツ州セラムのピーボディ博物館に所蔵されている。